

フランスの小中学生の放課後の生活に関する研究

——パリ市とリヨン市で実施した質問紙調査の結果から——

山 田 真 紀*

Etude sur les Activités après l'Ecole des Ecoliers et des Collégiens Français
—Rapport sur les Réponses aux Enquêtes Effectuées auprès des Ecoliers
et des Collégiens, à Paris et Lyon—

Maki YAMADA

1. 本研究の目的と方法

本研究の目的は、パリ市とリヨン市で実施した質問紙調査から得られたデータをもとに、フランスの小中学生の放課後の生活の実態を描きだすとともに、日本の小中学生を対象として実施された類似する既存の調査データをもとに日仏比較を行い、それぞれの特徴を明らかにすることである。

(1) 本研究の背景

フランスでは、学校生活、家庭生活、地域での生活をトータルにとらえ、子ども達の日常生活の全体を有意義なものに整えることで、子どもの成長と発達を支援していこうという考え方のもと、さまざまな社会の仕組が整備されている。この社会の仕組が整備されるようになった背景として、次の3点を指摘することができる。

第一に、1993年にフランス社会を襲った経済危機にはじまり、EU統合により加速度的に増加した移民問題にみられるように、近年、社会問題が増加・深刻化したことを受けて、社会の安定化に向けて、子どもの生活環境を見直す必要性が叫ばれるようになったこと、第二に、学校週4日制のもとでは、学校における学習だけでは不足するため、学校を補完する学習機会の場が必要になったこと、第三に、学習リズムの研究により、「教科教育における学習」と「教科教育以外の学習や活動」を調和させることが、子どもの健全な成長には必要であるということが指摘されるようになったことである。

さらに制度的には、学校は「内心形成にかかわる徳育 (l'éducation)」「客観的知識と技術の伝授 (l'instruction)」「それを基盤に職業資格の所有者を養成する養成教育 (la formation)」のすべてに関わるべきだとした1975年のアビ改革¹⁾と、「学校教育と学校外教

* 教育学部 子ども発達学科

育活動との連携の原理」がひとつの柱となった1989年の教育基本法（ジョspan法）²⁾の後押しを受けて、学校・地域・家庭の調和的な連携を模索する動きは盛んになってきた。歴史的には、この連携の模索は以下のように展開してきたといえる³⁾。

1981年7月：「補助学習の創造 La création d'études « assistées »」を目的とした通達。

1990年：「課外教育活動 Actions éducatives périscolaires (AEPS)」通達。

1992年8月25日：「学校の連帯ネットワーク Les réseaux solidarité école (RSE)」通達。

1992年10月7日：「学習随伴活動憲章 La Charte de l'accompagnement scolaire」の調印。

1993年5月10日：「課外教育活動」はZEP地域の子も達だけでなく、小学校5・6年生の外国籍や移民の子も達にも広げられる。

1994年：「課外教育活動」はセカンダリースクールの生徒達にも広げられる。学校の連帯ネットワーク RSE は4つの地方 rgions に広がる。

1996年：「学習随伴活動の地域契約 Les contrats locaux d'accompagnement à la scolarité (CLAS)」がZEPとZUSに通うコレージュとリセの学生を対象にして作られる。

1998年6月9日：「地域教育契約 Le contrat éducatif local (CEL)」通達。

1999年：「学習随伴活動の地域契約」が全土に広がる。

2000年：AEPS, RSE, CLAS は「学習随伴活動の地域契約 Le contrat local d'accompagnement à la scolarité」の概念のもとで統合される。

2001年：「学習随伴活動国家憲章 La Charte nationale de l'accompagnement à la scolarité」の調印。

年表中の「地域教育契約」と「学習随伴活動国家憲章」について補足的に説明しておきたい。

地域教育契約とは、以下の2つの通達、「時間割——子どもの時間と活動の整備：地域教育契約と課外リズムの導入（国民教育の通達 NO. 29, 1998年7月16日）」と「複数の省庁にまたがる通達2000年10月25日」において示されたものである⁴⁾。端的にいえば「国民教育省の責任に帰属しない時間帯に教育的な活動を提供する」ものである。日本でも学校週5日制の導入の際に議論になったように、学校外の時間の過ごし方には社会的・経済的な格差が生じやすく、子ども達の成長、特に学校での達成に影響を与える。そのため、子ども達の間に社会的・経済的な格差を生じさせない学校外時間の充実を図ることが目的とされている。地域教育契約に関わるのは、国家（特に国民教育省、文化省、青少年スポーツ省）、地方公共団体、アソシアシオン⁵⁾（特にスポーツ・文化・教育に関わるアソシアシオン）、「家族手当金庫 CAF」「社会活動基金 FAS」などの社会福祉の組織、家庭である。地域教育契約は、従来、それぞれの団体がアドホックに活動を展開していて一貫性をもたないこと、教育政策の縄張り争いが生じていたことから、活動に一貫性を持たせ、提供される活動の水準を維持するために考案されたものである。

「学習随伴活動国家憲章」⁶⁾とは、1992年の10月7日に調印された「学習随伴活動憲章」をさらに明確にするために発表されたものである。この憲章の根底には、社会的に恵まれない家庭の子も達は、教育の場にアクセスすること自体に困難がともない、学校以外の時間の過ごし方によって、子ども達の間には埋めがたい学業達成のギャップが生じてしま

うとの問題意識が流れている。地域教育契約に比べて、すべての子ども達の学業達成を引き上げることに焦点があてられており、①情報機器を使って知識にアクセスする方法を身に付けさせる、②市や地域社会にある文化・社会・経済的な資源を開放することで、子ども達の興味関心を広げ、社会性の学習をすることを奨励する、③個人に自律性と集団生活能力を身に付けさせるために、子ども達同士による活動を実施し、ピアサポートを奨励する、④子ども達の就学を勧めるために保護者をサポートする、ということが重点項目として挙げられている。この憲章では、学校での子ども達の学業達成を底上げするために、各協力者のサポートと資源を集約しようとするものであり、さらに「地域教育契約」に含まれた活動と連携をとらなければならないとされている。

(2) 本研究の目的と方法

フランスでは上記のように、子ども達の成長と発達に関わりのある行為者たちが、相互に協力しあう社会の仕組みをつくりあげている。これらの体制のもと、子ども達の生活は実際にはどのようなものになっているのか。社会の仕組みが意図する形態をもつにいたっているのか。このような問題意識のもと、フランスの小中学生が放課後や学校のない日にどのように過ごしているのかを探ることにした。

本研究で用いる方法は、質問紙調査法である。我々は2006年3月に、パリ市にある公立小学校1校、リヨン市郊外の山間部にある2つの小学校と1つのコレッジに協力を依頼して調査を実施した⁷⁾。調査は、校長に対するインタビューと、児童・生徒に対する質問紙調査、「学校生活と放課後の生活に関する質問紙調査」からなる⁸⁾。匿名性に配慮して、それぞれを「パリ市の小学校」「山の小学校」「谷の小学校」「谷のコレッジ」と呼ぶことにしたい。なお、小学校では、読み書きが堪能になる学年と考えられる4年生と5年生を中心に、またコレッジは日本の小学校6年生と中学校2年生に相当する学生の生徒に質問紙調査を依頼した。質問紙調査は自記式留置法を用い、協力を依頼したクラスのほぼ全員から回答を得た。回答総数は男子57名、女子62名、性別不明15名、合計134名である。それぞれの学校における回答者の学年、性別、人数は図表1に示した通りである。

図表1 調査対象校と回答者の概要

学校略称	A (パリの小学校)	B (山の小学校)	C (谷の小学校)	D (谷のコレッジ)
学校種別	公立小学校	公立小学校	公立小学校	公立中学校
地域	パリ市内	リヨン市郊外 (山)	リヨン市郊外 (谷)	リヨン市郊外 (谷)
全学級数	9	2	4	14
回答数	52	11	40	31
回答学年	CM1 (28名) CM2 (24名)	CM1・CM2 (11名)	CM1・CM2・CE2 (40名)	6年生 (20名) 4年生 (11名)
性別	男子23名 女子28名 不明1名	男子3名 女子5名 不明3名	男子20名 女子16名 不明4名	男子11名 女子13名 不明7名

2. 放課後のクラブ活動や習い事

質問紙調査において、放課後のクラブ活動や習い事の実態を把握するために、以下の質問をした。

設問 1 あなたは放課後にクラブ活動に参加したり、習い事をしたりしていますか。(学校の枠組のなかで行われる) 学校時間、もしくは(学校外で行われる) 学校外時間に参加しているクラブや習い事に関して、活動する日・時間・場所・指導者について、以下の例を参考にしながら書き込んでください。「場所」が学校であれば、場所の欄に○を、「指導者」が学校の先生であれば、指導者の欄に○を書き入れてください。

その結果を表にまとめたものが、図表 2 である。

この図表から読み取れる知見は以下のとおりである。

- * 記入された活動の総数は198個である。「犬の散歩」「テレビ」など、クラブ活動や習い事とは考えにくい回答が5個あり、それらは分析から除いている。この他、記入なし、もしくは「何もしていない」と答えた生徒は21名である。回答者総数が134名であるため、84.3%の生徒が何らかのクラブ活動もしくは習い事をしていること、単純に平均してひとり1.5個の活動に参加していることが分かる。
- * 活動の内容を類型化すると、「語学」「スポーツ」「文化」「宗教」「補習」「その他」となる。
- * 「スポーツ」で頻度が高かったのは、順にサッカー、ダンス、柔道、テニス、水泳、乗馬である。サッカーは圧倒的に男子の参加が多く(22名中17名)、ダンスは女子のみ、乗馬も女子が多いなど、性別によって参加するスポーツに偏りがある。
- * 「文化」で頻度が高かったのは、順に「演劇」「ピアノ」「ソルフェージュ」「合唱」「フルート」である。「文化」への参加は、男子9名に対し、女子32名で、女子のほうが圧倒的に多い。
- * 「宗教」という項目があるのも特徴的で、「カトリック入門 Catéchisme」には女子9名、性別不明2名の9人が通っている。この教室があるのは、水曜日か土曜日の午前中である。フランスには学校週4日制を採用している地域があり、その場合、水曜日と土日に学校が休みとなる。水曜日が休みになるのは、古くから水曜日に教会学校があったからだといわれている。「モスク」にいくと答えた生徒も2名いる。
- * 「学習^{つきそい}随伴活動国家憲章」で推進されている「補習」に関する活動に参加している生徒は非常に少なく、1名のみであった。
- * クラブ活動や習い事が行われている場所について分析すると、いくつかのクラブ活動が学校内で実施されていることが分かった。A小学校では英語、演劇、B小学校では合唱と集団スポーツ (Sports Collectifs)、D小学校ではトルコ語が小学校内で実施されている。
- * ピアノとバイオリン、空手と記入したのはパリ市にあるA小学校の生徒のみ、ラグビーとモスクはリヨン市郊外のみ、というように、学校周辺でアクセス可能な活動が、地域によって多様である現実を知ることができる。
- * 「プレーステーション」を分析に含めるか、誤答として処理するかは迷うところで

フランスの小中学生の放課後の生活に関する研究

図表2 放課後のクラブ活動およびレッスンの内容

活動内容		男子	女子	不明	合計	特記すべきこと
語学	英語	6	10	0	16	A小の生徒が多い (A小内で実施されているため)
	中国語	0	2	0	2	場所は教会
	トルコ語	1	0	1	2	D小の生徒のみ (場所は学校)
	ベトナム語	0	0	1	1	
スポーツ	サッカー	17	3	2	22	練習回数は週2～3回と多い
	ラグビー	4	0	0	4	リヨン市郊外のみ
	バスケットボール	2	1	0	3	
	ハンドボール	1	0	0	1	
	集団スポーツ	1	0	1	2	B小の生徒のみ (場所は学校)
	トレーニング (体操)	1	2	0	3	B小の生徒のみ
	テニス	3	5	0	8	
	卓球	2	0	1	3	A小の生徒の場合、場所は学校
	陸上競技	0	5	0	5	女子のみ
	体操	1	2	1	4	
	水泳	2	5	1	8	
	スキー	4	0	2	6	リヨン市郊外の生徒のみ
	フェンシング	1	1	0	2	
	ロッククライミング	1	1	0	0	
	柔道	7	2	0	9	
	空手	3	0	0	3	A小の生徒のみ
	忍術	1	0	1	2	D小の生徒のみ
	ダンス	0	13	0	13	女子のみ
	モダンダンス	0	2	0	0	
	ヒップホップ	1	0	0	1	
	乗馬	0	5	2	7	
	自転車	3	1	0	4	D小の生徒のみ
文化	演劇	4	7	0	11	A小の生徒が多い (A小内で実施されているため)
	合唱	1	2	2	5	B小の生徒のみ (B小内で実施されているため)
	オーケストラ	0	1	0	0	
	ソルフェージュ	0	5	1	6	
	ピアノ	1	7	0	8	A小の生徒のみ
	フルート	2	2	1	5	
	バイオリン	0	2	0	2	A小の生徒のみ
	パーカッション	1	0	1	2	
	ギター	0	1	1	2	
	アコーディオン	0	1	0	1	
	音楽	0	1	0	1	
	創造芸術	0	1	0	1	
	ヒエログリフ (古代エジプト象形文字)	0	1	0	1	
	曲芸	0	1	0	1	
宗教	カトリック入門	0	7	2	9	水曜日から土曜日の午前中に実施
	モスク	1	0	1	2	D小の生徒のみ
補習	数学	1	0	0	1	
その他	ブレーステーション	4	2	0	6	リヨン市郊外の生徒のみ
何もしていない		5	13	3	21	

あったが、結局、分析に含めたのは定期的に時間を決めて「プレーステーション」をしていると回答している生徒が多くいたためである。「プレーステーションをする会」のようなものがあるのかもしれない。

- *活動をする曜日についての回答をみると、サッカーにおいて週に2～3回練習していることが分かった。多くの回答において活動をする曜日と時間が記入されているが、それが毎週の活動であるか、月に数回の活動であるかは判別できない。これは質問紙調査の設計上のミスで今後は改善したい。

以上の結果を、日本の子ども達の学校外でのクラブ活動や習い事の実態と比較してみた。日本の実態を知る資料としたのは、平成18年3月に公表された、平成17年度文部科学省委託調査の「地域の教育力に関する実態調査」⁹⁾である。この調査は、全国から10自治体を選択し、小学校2年生と5年生、中学校2年生のあわせて2953名を対象として実施された調査である。サンプルの構成は、「小学校2年生」34.1%、「小学校5年生」33.3%、「中学校2年生」32.6%である。

この調査では、「学校がある日に、塾やならいごとをしていますか（部活動をのぞく）」「何をしていますか（あてはまるもの全部に○をつけてください）」という設問で、以下の8つの選択肢を示している。数値は「学校がある日」における参加の割合、カッコ内は「土日」における参加の割合を示している。

スポーツ（野球・サッカー・水泳・バレエ等）	45.5 (57.6)
塾	45.4 (25.9)
楽器演奏（ピアノ・バイオリン・ギター等）	24.3 (10.0)
習字	16.6 (6.5)
外国語	15.8 (5.5)
そろばん	6.3 (3.1)
絵を描く	2.2 (1.5)
その他	6.4 (6.9)

「スポーツ」や「楽器演奏」は複数の活動が統合されており、実際には生徒がどの活動に参加しているのかを判別できないダブルバーレル質問になっている点に問題があるが、おおよその日本の習い事の状況を知ることができる。この結果をフランスの結果と比較すると、以下の点を指摘することができる。

- *日本では半数近い子どもが平日に塾通いをしているのに対し、フランスでは補習や学習塾へ通う生徒はほとんどいない。フランスでは「学習随伴活動^{つきそい}国家憲章」により、市やアソシエーションが補習や学習の機会を開いているはずであるので、意外な結果である。
- *日本において「その他」を選んだ生徒が6～7%にとどまっていることが特徴である。すなわち習い事の種類が選択肢に示されている「スポーツ」「塾」「習字」「外国語」「そろばん」「絵」でほとんど網羅されており、習い事の内容がステレオタイプ化されている。それに対し、フランスでは特に文化系の活動の内容が豊かである。

最後に、設問1の分析を進める上で直面した問題点と今後の作業課題についてまとめておきたい。

- *「放課後に参加する活動」という意味を、「授業が終わったあとに学校内で提供される活動に参加すること」と「下校したあとに地域で提供される活動に参加すること」の2つに区別するように設問文を工夫し、学校で行われる活動には「場所欄」に○を記入するようにお願いした。それによりクラブ活動の一部は学校内で実施されていることが分かった。さらに、学校内で実施される活動を指導しているのは、国民教育省管轄の教師なのか、市やアソシエーションなどの指導者なのかを判別するために、「指導者欄」に学校の先生であれば○を記入するようにお願いした。しかし、生徒にとって学校にいる先生は、その先生の所属や管轄がどこであろうと「先生」であることには違いがなく、これらを生徒に区別させるのは困難であった。
- * 今後は「場所欄」に記入されたスタジアムやセンターがどのような場所であるのかをひとつひとつ検証する作業が必要である。この作業により、ある地域において、生徒がアクセス可能な教育施設にはどのようなものがあるのかについて、より現実に即した実態解明が可能になると思われる。

3. 学校やクラブ活動のない日の過ごし方

次に学校やクラブ活動のない日に、子ども達が誰とどこで何をしているかを知るために以下の質問をした。

設問2 クラブや学校がない日は、ふつう、何をしていますか。誰とどこで、何をしているかを自由に書いてください。(例：家の近くの公園で友達とサッカーをして遊ぶ。家で宿題をする。)

その結果を表にまとめたものが、図表3-1と3-2である。図表3-1には複数の生徒が回答した活動について、図表3-2にはひとりの生徒のみが回答した活動についてまとめている。この図表から読み取れる知見は以下のとおりである。

- * 学校やクラブ活動のない日の過ごし方の内容は、「勉強」「情報機器（ゲーム）」「遊ぶ」「外出」「スポーツ」「乗り物で遊ぶ」「お手伝い」「趣味や家遊び」に分類することができた。
- * 特徴的なのは「家で宿題をする」と答えた生徒が多かったことである。設問文の例に「家で宿題をする」を示したことが誘引材料となったと思われるが、これが事実であるのなら、フランスの学校では宿題を出すことが日常的であり、子ども達に家で宿題をすることが習慣化されていることを示すものである。
- * テレビゲームをすると答えた生徒が多かった。テレビゲームをすると答えたのは男子の割合が高い。日本の子ども達のようにプレステーションや任天堂DSなどで遊んでいることが分かる。コンピューターゲームを含めると、室内でゲームをして過ごす子どもが多くいることが分かる。
- * リヨン市郊外は3月の雪深い時期に調査したこともあり、スキー、スケート、スノー

図表3-1 学校やクラブのない日の過ごし方

	活動内容	男子	女子	不明	合計	特記すべきこと
勉強	家で宿題をする	15	32	8	55	「友達と」を1つ含む 多くは「家でひとりで」
	勉強する	1	0	1	2	
情報機器	テレビゲーム	22	9	3	34	プレーステーション1・2／任天堂DS／ゲームキューブ／ゲームボーイなど
	テレビをみる	4	11	2	17	
	コンピュータで遊ぶ	12	7	1	20	インターネット2つを含む インターネット経由のゲームも含む
遊ぶ	遊ぶ	0	2	1	3	自分の部屋で遊ぶを含む
	きょうだいと遊ぶ	5	4	1	10	内容はスキーやルージュ, 自転車, ぶんこ, ラグビーやサッカー, かけっこ きょうだいの世話, けんかも含む
	友達と遊ぶ	3	5	2	10	「ラグビー, 野球, ダンスをして遊ぶ」を含む
	友達の家に行く	3	4	1	8	「誕生会に行く」を含む
	友達を家に招く	1	3	2	6	
	外で遊ぶ	0	3	3	6	「蝶を見つける」を含む
外出	家族と外出	0	3	0	3	おばあちゃんの家に行くなど
	散歩	3	5	0	8	「犬の散歩」を3つ含む 「友達」や「おじいさん」を含む
	映画を見に行く	0	2	0	2	「友達と」もある
	買物	1	1	0	2	
	つりにいく	2	0	0	2	
スポーツ	スポーツをする	0	4	1	5	バスケット, テニスを含む
	スキー	7	4	2	13	「家族とともに」を2つ含む クロスカントリースキーを含む
	スケート	1	0	1	2	
	スノーボード	2	3	1	6	サーフィンと呼ぶ
	プール	1	2	0	3	友達, きょうだい, 両親と
	サッカー	9	1	6	16	「友達と」を多く含む その他「いところ」や「きょうだい」有
乗り物	ローラースケートをする	0	6	0	6	女子のみ／「友達と一緒に」も含む
	自転車	2	2	3	7	友達やきょうだいと サイクリングを含む
	電動の乗り物 machines électriques で遊ぶ	2	1	1	4	オートバイや電動のキックボードなど
お手伝い	部屋を片付ける	0	1	1	2	
	お母さんの手伝い	0	2	0	2	
趣味や家遊び	読書	1	4	0	5	
	絵を描く	0	3	1	4	
	手芸 activités manuelles をする	0	3	0	3	真珠を作る
	ボードゲームで遊ぶ	0	1	1	2	
	ペットと遊ぶ	0	3	0	3	

図表3-2 学校やクラブのない日の過ごし方（回答数1のもの）

男子	女子	不明
モスクに行く 切手の整理 トランプで遊ぶ カヤック ハンティング（おじいさん） 歌の練習 雪遊び	音楽を聴く 明日の準備 友達に電話 レジャーセンターに行く	女優ごっこ ガーデニング

ボードなどの雪山スポーツの記載が多かった。パリ市では雪山スポーツを記入する子どもはならず、外遊びの種類は地域の環境に大きく左右されることが分かる。

以上の結果を、日本の子ども達の放課後や学校のない日の過ごし方と比較してみたい。資料としたのは、前項と同じく「地域の教育力に関する実態調査」である。この調査では「学校が終わった後、寝るまでの間、ひとりですぐすときについて。ひとりで何をしていますぐすことが多いですか。塾やならいごと以外でおこたえください（次の中から多いものを3つまで○をつけてください）」「学校が終わった後、寝るまでの間、みんなですぐすときについて。みんなで何をしていますぐすことが多いですか。塾やならいごと以外でおこたえください（次の中から多いものを3つまで○をつけてください）」という2つの設問で、それぞれ「学校がある日の時間の過ごし方」と「土曜日や日曜日の時間の過ごし方」を聞いている。その結果を示したのが以下である。なお、数値は「学校がある日」における参加の割合、カッコ内は「土日」における参加の割合を示している。

「ひとりですること」

テレビを見る、マンガ・雑誌を読む、音楽をきく	83.4 (75.5)
勉強する、本を読む	56.4 (43.6)
テレビゲーム、携帯ゲームをする	44.2 (43.4)
外で遊ぶ（山や川、海に行く）	14.2 (13.4)
スポーツをする（部活動以外で）	14.0 (14.2)
ひまつぶし（買い物、立ち読みなど）	7.7 (14.0)
その他	10.1 (10.6)

「みんなですぐすとき」

おしゃべりをする	51.8 (43.3)
一緒にテレビを見る、マンガ・雑誌を読む、音楽をきく	49.7 (44.6)
部活動をする	25.3 (19.9)
テレビゲーム、携帯ゲームをする	29.3 (27.4)
勉強する、本を読む	20.6 (11.5)
カードゲーム、ボードゲームをする	15.0 (12.2)
おにごっこ、かくれんぼなどをする	14.9 (9.0)
スポーツをする（部活動以外で）	13.9 (18.8)

外で遊ぶ（海，山，川に行く）	11.3 (21.7)
ひまつぶし（買い物，立ち読みなど）	7.6 (22.4)
（その他）両方において10%以下の項目	
パソコン，メールをする	
グループ活動に参加する（子供会・ボーイスカウト等）	
地域の行事に参加する（お祭りなど）	

フランスの調査分析では「ひとりですること」と「みんなですること」が混在しているという限界があるものの，この結果をフランスの結果と比較すると以下のことが分かる。

- * フランスと日本において「テレビを見る」「テレビゲームをする」「勉強（宿題）をする」「外で遊ぶ」「スポーツをする」において共通する項目が見られ，両国ともに「テレビを見る」「テレビゲーム」「勉強（宿題）をする」において頻度が高い。
- * フランスでは「友達と一緒に外で遊ぶ」に類型化できる回答が多かったのに対し，日本では「おにごっこなどの集団あそび」「スポーツ」「外で遊ぶ」への回答が1割から1.5割とやや低い傾向がある。

この設問は，フランスの子ども達が学校やクラブ活動のない時間をどのように過ごしているかを知るための項目であるが，日仏比較よりも重要なのは，「子どもを取り巻く社会的状況の違いによって，これらの時間の使い方に違いがみられるのかどうか」を明らかにすることである。フランス国内で地域間格差がみられるか，さらにこれらの時間の使い方の質が異なると，子どもの勉強への構えにも違いが見られるか，などについて，今後，分析していきたい。

4. 自宅学習の時間

最後に，自宅学習の時間を知るために以下の質問をした。

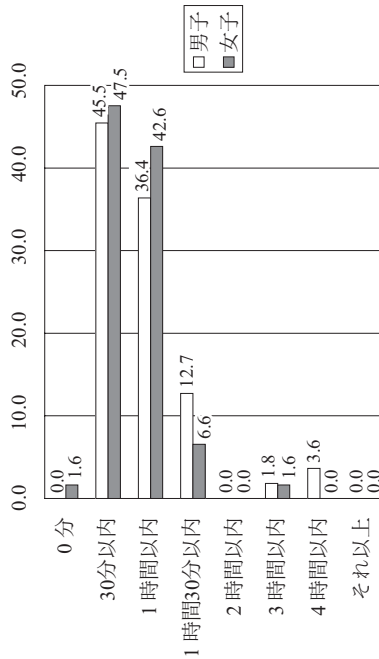
設問3 あなたは家で学校の勉強を，平均してどのくらいしていますか。

- ①学校のある日 時間 分
- ②学校のない日 時間 分

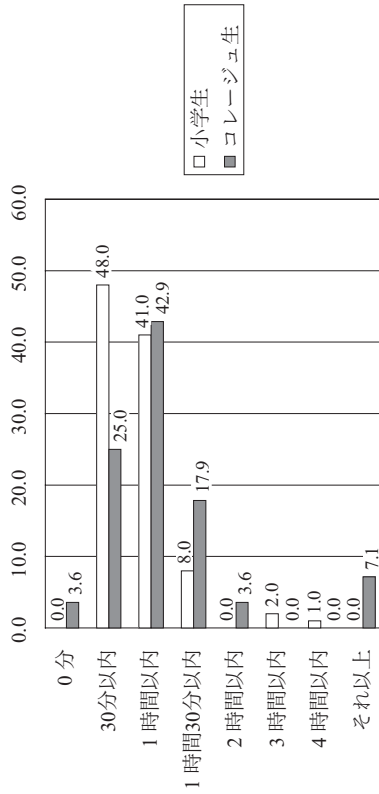
その結果をまとめたのが図表4-1から4-4である。ここから以下の知見を読み取ることができる。

- * 家で勉強する時間が0分であると答えた生徒の割合が5%未満であり，家でまったく勉強をしないという生徒は少ない。
- * 小学生において，学校のある日の自宅学習時間は，30分以内が約5割，30分から1時間が4割であり，多くの生徒が1時間以内ではあるものの，自宅で勉強をしている様子が分かる。
- * 小学生に比べてコレージュの生徒は，学校のある日の自宅学習時間がやや長くなり，30分以内の割合が2.5割に減り，1時間から1時間30分以内と答える生徒が2割弱となる。

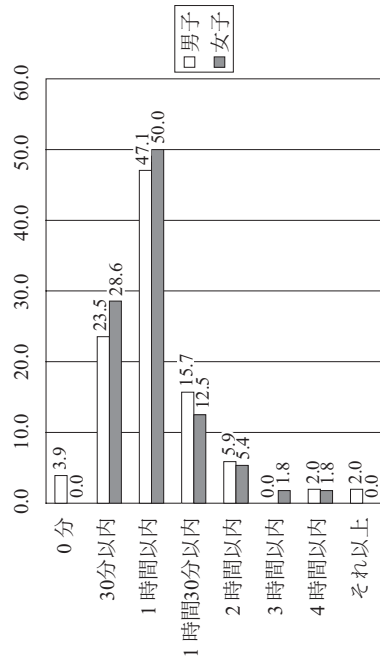
図表4-1 学校のある日：家で勉強する時間（男女比較）



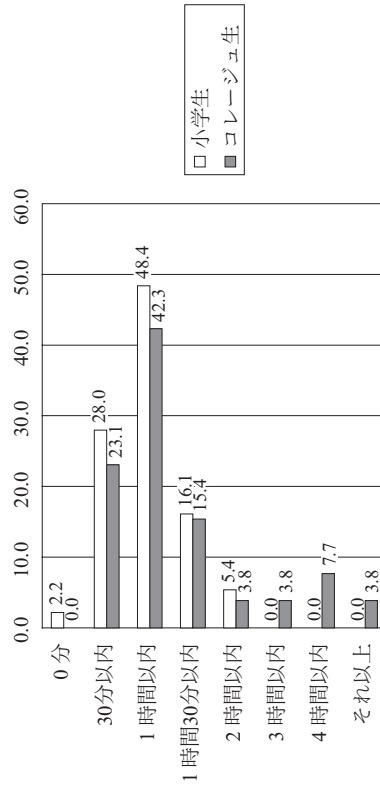
図表4-3 学校のある日：家で勉強する時間（学校段階別）



図表4-2 学校のない日：家で勉強する時間（男女比較）



図表4-4 学校のない日：家で勉強する時間（学校段階別）



図表5 日本の子ども達の自宅学習時間

	小学校5年生	中学生2年生
全く、またはほとんどしない	9.1	15.7
30分より少ない	17.3	11.9
30分以上、1時間より少ない	30.3	18.8
1時間以上、2時間より少ない	24.7	29.9
2時間以上、3時間より少ない	10.1	17.9
3時間以上	7.0	5.0
その他	0.5	0.2
無回答	1.0	0.5
実数	105856名	82401名

注) 数値は%

*一方、学校のない日の自宅学習時間は、小学生・コレッジ生ともに学校のある日よりやや長くなる傾向にあり、それは小学生に顕著である。

この結果を日本の実態と比較してみたい。比較のための資料とするのが、国立教育政策研究所「平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査」である¹⁰⁾。この調査は全国の小学生約21万1千人、中学生約24万人を対象とした大規模な調査であり、調査項目の一部において、「学校の授業時間以外に、1日にだいたいどのくらい勉強しますか。(土曜日、日曜日は除いてください。塾で勉強したり、家庭教師の先生に教わったりしている時間も含めてください)」という質問をしている。この調査は各学年で結果を集計しているが、フランス調査で対象としたのと同じ年齢層の「小学校5年生」と「中学校2年生」の結果を示すと図表5の通りとなる。図表4と図表5を比較すると以下のことが分かる。

- *「全く、またはほとんどしない」の割合が日本で高い。小学校5年生で10%、中学校2年生で15%程度である。
- *しかし一方で、「1時間以上、2時間より少ない」と答える割合が、小学5年生で24.7%、中学2年生で29.9%おり、2時間以上勉強する生徒も、小学5年生で17.1%、中学2年生で22.9%おり、フランスよりもかなり割合が高い。これは塾通いの割合が5割と高く、塾で勉強している時間も含めていることから出た結果だと思われる。日本では、学校以外では勉強を全くしない生徒と、塾を含めて勉強する生徒に二極化していることをうかがわせる結果である。

5. 本研究のまとめと今後の展望

最初に述べたように、フランスでは学校・家庭・地域が連携して子どもの生活環境を整える取り組みを行っている。その理念や仕組は「地域教育契約」や「学習随伴活動^{つきそい}国家憲章」に関する公的文書や年次報告書を参照することで、ある程度は把握することができる。しかしながら、これらの仕組が子ども達の生活にどのように浸透しているのかを知ることこそが肝要である。管見の限り、先行研究では子ども達の放課後の生活についての実

態を知ることのできる資料はほとんどない。

そこで、本調査は、フランスの小中学生の放課後の生活の実態を描き出す手がかりを得るための予備的な調査として実施された。本論文で報告したように、フランスの子ども達の生活実態を多少なりとも垣間見ることができた。しかしながら、実際に調査をしてみると、調査自体の問題点や限界を感じるようになった。今後の調査計画の策定のために、本調査の問題点と限界について整理しておきたい。

第一に、質問紙調査法がもつ限界についてである。質問紙調査では、放課後にしている活動や活動時間、勉強時間、クラブ活動や習い事がない日の過ごし方について、断片的に知ることができても、子ども達の生活のリズムの全体を把握することができない。また記入された活動が実際にはどのようなものなのかを推測することしかできない。実態に肉薄するためには、タイムスケジュールを記入してもらいながら実態について聞くインタビュー調査や、子ども達の1日に同行するフィールド調査を実施する必要がある。そうすることにより、記入された活動が、親とピアノの先生が契約するような単なる習い事なのか、地域教育契約のもとで展開されている活動なのかを区別することができ、また指導者が学校の教師である場合も、学校が責任主体として運営している活動なのか、学校の教師が別組織に雇用されて指導者をしている活動なのかを峻別していくことができるだろう。

第二に、「放課後」の定義についてである。本研究では、調査題目に「学校のあとの活動 *Activités après l'école*」という言葉を用いたため、設問文に「放課後に学校で行われる活動も含めて回答するように」との注意書きを含めたものの、子ども達は、下校後の時間を想定し、学校で行われるクラブ活動や補習活動は回答に含めなかった可能性がある。「地域教育契約」の通達では、子ども達の生活時間を「学校時間 *le temps scolaire*」「課外の時間 *le temps périscolaire*」「学校外の時間 *le temps extra-scolaire*」の3つの時間に区分し、「課外の時間」は、学校の直前や直後、つまり①登下校の時間、②授業前の受け入れ時間、③学校給食時間、④授業後の監督つき学習 *les études surveillées*、学習随伴活動 *l'accompagnement scolaire*、文化とスポーツ活動、⑤水曜の午後を指し、「学校外の時間」は、夕方、授業のない水曜日、週末、長期休暇を指すというように区別している。運営主体が国民教育省であろうと、市であろうと、アソシアションであろうと、学校を会場として行われている活動は生徒にとって「学校の活動」として認識されている可能性が高いため、調査では「授業が終わってから学校で行う活動」と「学校から帰ってから行う活動」のふたつを区別して質問すべきであった。

第三に、学校・地域・家庭の連携の仕組の効果をj知るための調査方法の工夫が必要である。「地域教育契約」や「学習随伴活動国家憲章」は子ども達の生活に何をもたらし、どのような効果をあげ、いまだどのような課題を抱えているのか。それを知るためには、この仕組に関わっている人々の生の声を聞く必要がある。

今後は、連携の制度や仕組を正しく理解するとともに、その実態や課題を解明できるような調査を続けていきたい。

注

- 1) 桑原敏明「フランス——強い伝統：自由と責任」、佐藤三郎編『世界の教育改革——21世紀の架け橋』東信堂、1999年、124頁。1975年のアビ改革において、学校は内心形成にかかわる

徳育 (l'éducation), 客観的知識と技術の伝授 (l'instruction), それを基盤に職業資格の所有者を養成する養成教育 (la formation) すべてに関わるべきとされ, 教育課程上では, いわゆる教科外活動を大幅に取り入れること, 価値観形成に必要な教材を用意し, 自ら価値観を選択する能力をみがく契機とすることに重点がおかれた。その流れのなかで, 「今日のフランス学校は, 一面的な知育学校の性格から脱皮し, 生活の主人公としての人間の全面発達を目指している」と紹介している。

- 2) 二宮皓『世界の学校——比較教育文化論の視点にたって——』福村出版, 1995年, 44頁。1989年の教育基本法(ジョスパン法)で, 「学校教育と学校外教育活動との連携の原理」がひとつの柱になったこと, そして教員は教育共同体のなかでさまざまなパートナーと連携しながら, 「学校教育計画」のもとで教員チームの一員として働くことが求められるようになったことを紹介している。
- 3) 以下の年表は, 2003年11月28日に Jean SALQUE 氏(ナンシー・メッツ大学区総長, 学校生活の校長 Recteur de l'Académie Nancy-Metz, Proviseur vie scolaire)を訪問した際, 提供いただいた資料による。他に, 同様の情報が以下のサイトに掲載されている。
<http://www.education.gouv.fr/cel/imagesetdoc/Guide.pdf>
<http://www.educnet.education.fr/dossier/accompagnement/cadre5.htm>
- 4) このふたつの文書は, 地域教育契約のホームページ <http://www.education.gouv.fr/cel/pres.htm> に接続し, 「Pourquoi le Contrat Educatif Local ?」の項目からアクセスすることができる。
- 5) アソシアシオンとは, フランス全土に広がる社会教育組織である。詳しくは以下の論文を参照のこと。岩橋恵子「フランスにおけるアソシアシオンの発展と今後の課題」『社会教育』33(9), 1989年, 82-92頁。岩崎久美子「フランスにおける社会教育指導者——アニメトゥールの資格と養成制度——」『社会教育』53(10), 1998年。岩橋恵子「現代フランスの私学問題とアソシアシオンの役割」『フランス教育学会紀要』12号, 2000年, 69-76頁。小橋(藤井)佐知子「フランスにおけるアニメトゥール職」『日本比較教育学会紀要11号』, 1985年, 43-50頁。
- 6) <http://www.education.gouv.fr/cel/imagesetdoc/Charte.pdf>
「^{つぎをい}学習随伴国家憲章」との訳語は, 以下の論文による。岩橋恵子「学校周辺活動の展開とアニメトゥール」古沢常雄(研究代表者)『フランスの複雑化する教育病理現象の分析と実効性のある対策プログラムに関する調査研究(平成16年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書)』, 平成19年3月, 67-78頁。
- 7) この調査は, 「生涯学習社会における学校の役割と学校建築の持続的再生に関する国際比較研究会」(研究代表者: 村上心, 生活科学部助教授)の研究の一環として行われたものである。特に, 研究会のメンバーのひとりである浜名エレヌ氏(人間関係学部教授)の尽力によるところが大きい。ここに記して感謝の意を表したい。
- 8) 小学校とコレージュでは質問内容は同じであるが, 学校の呼び方や科目名が異なるため, 小学校用とコレージュ用の2種類の質問紙を準備した。調査用紙の現物とその日本語訳は, 以下の論文に掲載しているのでそちらを参照いただけたら幸いである。山田真紀・浜名エレヌ「フランス共和国における小中学生の学校生活に関する研究——小中学生を対象にした質問紙調査の第一報告——」, 相山女学園大学研究論集(社会科学篇)第38号, 平成19年3月, 141-158頁。
- 9) 以下のサイトにおいて調査の概要を知ることができる。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/siryou/003/06032317/002/005.htm
- 10) 以下のサイトにおいて調査の概要を知ることができる。
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/katei_h15/H15/03001200000007003.pdf